



## サハリン少数民族の言語と文化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学岩見沢分校 公開日: 2017-07-07 キーワード: 作成者: 佐藤, 知己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00009158">https://doi.org/10.32150/00009158</a>

# サハリン少数民族の言語と文化

佐藤 知己

## 0. はじめに

ゴルバチョフのピエレストロイカからソ連の解体に至る自由化の流れの中で、外国人による現地調査、研究、報道の自由も大幅に認められ<sup>1)</sup>、これによって、これまでなかなか知ることができなかった分野の情報も次第に得ることが可能となりつつある。サハリン（樺太）、クリル列島（千島列島）に関する情報も、そのような分野の一つであり、これに伴い、そこに住む先住少数民族についても、これまでと比較するならば、一般に知られる機会が確実に増えていると思われる<sup>2)</sup>。また、国連のいわゆる「国際先住民年」も、これらの少数民族への一般の関心を高めるのに貢献しているようである。このような状況の中で、いわゆる「教育の現場」においても、これら先住少数民族に対する関心の高まりが予想されるのであるが、（老婆心ながら、一言すれば）少数民族に関する運動や教育実践を進めていく際においても、その民族の文化そのものについて、理解を深めて行く努力が、やはり必要ではないかと思われる<sup>3)</sup>。

筆者は1990年夏、1991年夏の二度、サハリンにおける少数民族の調査に参加し<sup>4)</sup>、これらの民族の置かれている現状について多少見聞することを得た。本稿では、これら二度の調査から、主に北方少数民族のウイльта<sup>5)</sup>、ニブフ<sup>6)</sup>両民族の言語、文化とその現状について触れ、また、筆者の専門である言語人類学的な観点から、北海道のアイヌ語も含め、これら北方諸民族の言語の特色について簡単に述べることにしたい。

## 1. 1990年度の調査から

1990年度の調査では、日本側からは池上二良（専門はウイльта語、以下同様）、村崎恭子（アイヌ語）、中川裕（アイヌ語）、の諸先生に私（アイヌ語）、それに、外国からはアメリカからアウステルリッツ（ニブフ語）、ラムゼイ（朝鮮語）、オランダからグラーフ（音声学、言語政策）の諸先生が加わった。以下では、調査で訪れた主な地点ごとに印象を述べることにするが、ちなみに、最近の統計（Itogi 1990）によって、最初にウイльта、ニブフ、両民族のサハリンにおける概況を述べて置くと、ウイльта（自分をウイльтаと申告した人）の人口はサハリン全体で129人となっており、そのうち58人がウイльта語を自分の母語とみなしている。これに対し、ニブフの全体人口は2008人で、ウイльтаの十数倍の人口を有するとはいえ、ニブフ語を自分の母語とみなしている人は447人であり、ウイльта語の場合よりニブフ語を母語とする人の割合は低くなっている。しかも、1979年の調査で、人口2053人に対し、母語をニブフ語とする人の数が597人であったことと比較すれば（Vysokov 1985 : 72）、ニブフ語を母語とする人の数は徐々にではあるが確実に減ってきていると言える。

ユジノサハリンスクにて：

サハリン州の州都であるユジノサハリンスク（旧豊原）のホテルで、ウラジオストックの極東歴史考古民族学研究所から来て下さったオタイナ博士（ニブフ出身の女性言語学者）にお目にかかっ

た。オタイナ先生のお話では、先生は1931年、アムール川下流のマゴのお生まれで、1981年からサハリンで始まったニブフ語教育で用いられているニブフ語の教科書 (Sangi i dr. 1981) の著者のお一人でもある。同行の中川氏と、先生の作られたサハリン方言用の教科書をもとにニブフ語の発音を録音させていただく。なにしろ、ニブフ語の音声資料などというものはこれまで日本には殆ど全く存在しないし、たとえあったとしても、そうたやすく聞けるものではないので、貴重な資料である。もっとも、先生の出身地のアムール方言と、教科書のサハリン方言とではかなりの差があると思われるので注意が必要だが、教科書の著者自身が録音するのだから、質問もできて、作業も比較的やりやすい。はじめて聞くニブフ語の発音では、特に、無声のR音の発音が珍しいものと思われた。かなり口蓋化した音で、いわばシュに近く聞こえる音である。本で読んで想像していたものとは相当違っていたので、驚かされた。オタイナ先生は、この後も我々の調査に同行して下さった。

ポロナイスクにて：

ウジノサハリンスクから車で、北のポロナイスク (旧敷香) へ向かった。ポロナイスクは、戦前の日本時代、北方諸民族の居留地である、いわゆる「オタスの杜」があったところで<sup>7)</sup>、現在も昔を知る北方少数民族の人々が住んでいる。1989年の統計 (Itogi 1990) によれば、ウイльта (オロッコ) は102人で、そのうちウイльта語 (オロッコ語) を母語とする人は57人、ニブフは90人で、そのうちニブフ語を母語とする人は11人である。残り的人々はロシア語を母語としているわけで、この数字からみるところでは、現状では固有の言語は相当危機的な状況にあると言わなければならない。

ポロナイスク滞在中の一日、ポロナイ川を船で渡り、サチという所 (中島) に少数民族の人々 (ニブフ、ウイльта、ナナイ) とピクニックに出かけた。岸から5、6メートルの所に網をかけると、40センチほどもあるマスがとれる。それをぱっとさばいて筋子を取り、串を打ち、焚火のまわりにズラリと並べて焼いてむしって食べるのがなかなかいける。やがて、民族衣装を着ての歌や踊りが始まり、珍しい歌や踊りを写真やビデオに収めることができた。最後に、川の水を沸かしてお茶を飲まれたが、妙な味がする。嘘か真か、上流に製紙工場があるせいだ、と言われて、気持ちが悪くなった。たくさん食べたマスのことも急に気になり始めた。汚水を浄化しないまま川に捨てているからだという。豊かな自然も、どんどん蝕まれつつあるのだ。

ポロナイスクには、まだ日本名を持ち、日本語を知っている少数民族の方が残っている。中でも、ウイльтаの小川初子さん、小川 (金) ナツ子さんにはお世話になり、ウイльтаの歌や踊りを収録させていただいた。また、この時、アイヌの女の人のということで呼ばれていた人は、話を聞くと、アイヌではなく、父母が日本人であることがわかった。残留日本人は他にも随分多いようだった。目的は達せられなかったが、今も消えずに残っている戦争の傷跡を感じさせられた。

ヴァールにて：

ノグリキで調査団はウイльтаの調査とニブフの調査の二手に別れることになった。私は池上先生について、さらに北のヴァールという村へ、ウイльтаの調査に行くことになった。ヴァールは石油採掘のために作られた寒村である。村長の車に乗って早速ウイльтаの人の家へ向かう。髪の毛が真っ白な、魔法使いのおばあさんのようなおばあさん (1912年生) が出てきて、ウイльта語を流暢に話しはじめたので、はるばる来たかいたかと思った。ここに数日滞在して、語彙や物語を収録した。おばあさんの娘さんはここの幼稚園の先生をしており、まだ40代だが、ウイльта語をかなりよく話す。しかし、彼女の大学生の長女をはじめ、子供達は全くウイльта語がわからない。このままではウイльта語がなくなってしまうので、幼稚園でもウイльта語を教えるようにしたいのだが、教材も機材もなく、と話していた (私は日本に帰ってから、人を介してテープレコーダーとテー

プを送った)。ヴァールにはウイльтаは170人いるということだったが、そのうちどれくらいの人がウイльта語を話せるかは不明である。ちなみに、ヴァール滞在中、国営のトナカイ牧場の幹部（ロシア人）の方の家で他にウイльта語を話せる2人のおばあさんにお会いできた（もっとも、昨年（1992年）池上先生が行かれてみると、そのうちの一人は亡くなられていた由）。これらのおばあさん達は海岸部のチャイボでトナカイ飼育（国営）の仕事をしていた方々で、伝統的な生活様式をよく御存じのようだった。牧場の幹部は、環境破壊によるトナカイ飼育への悪影響や、ウイльтаの伝統的な言語、文化の危機的な現状を非常に憂慮し、日本の援助を求めていたが、日本の手が入ることにより、更に状況が悪くなる可能性の方が大きいのではないかと思った。

オハにて：

オハから車で、ニブフが多く住むニェクラソフカ村へ向かう。ここにはニブフ語を教える学校がある。夏期休暇で生徒はいなかったが、ニブフ語を教える先生からニブフ語教育について説明を受ける。ニブフ語のクラスは3年生までで、1学年20人ほどだという。

ニェクラソフカにはニブフ語の本を多く所蔵する図書館もあって、そこでニブフの人達と交流会をした。モスという名の伝統料理を初めて食べる。一口で言えば、魚の皮で作ったゼリーに野イチゴを混ぜたもので、ちょうど、プリンか、それこそムース（mousse）みたいな食べ物だ。真っ白いヨーグルトに、紫色のブルーベリーが点々としたものを想像すれば外観に近い。同行の中川氏はいたくお気に入りの御様子であったが、私は生臭いのが苦手で、どうにもうまいとは思えなかった。

ニェクラソフカの図書館で40代の女性にニブフ語の教科書（アムール方言用）を読んでいただく。この近辺のニブフ語は、大陸のアムール方言に近く、学校のニブフ語教育でも、アムール方言に基づく教科書を使っている。この方のお話によれば、ニェクラソフカ村でニブフ語を話せる最も若い世代は30代ということで、ニブフ語は例えば北海道のアイヌ語よりも、まだずっと良い条件にあると思った。

オハで、あるニブフ人の家に招かれた時、親戚のニブフのおばあさん（ショイグックさん）が来ていて、伝統的な歌や踊りや楽器演奏を実演して下さった。わざわざホテルまで録音器やビデオを取りに戻り、収録した。ただ、夜中の12時頃、突然、太鼓や金属製の飾りの付いたシャーマンの帯の鳴る音を聞かされて、アパートの他の住人はさぞかしびっくり仰天したことだろうと思う。

ライチシカにて：

オハから一旦ユジノサハリンスクへ戻ってから、クラスノゴルスク（珍内）へ出かけた。その北に、ライチシカ湖という大きな湖がある。戦後、ここから北海道へ引き上げて来た樺太アイヌの方に、藤山ハルさんという天才的なアイヌ語の話し手がいて、数々の貴重な記録を残して下さったので、ライチシカはアイヌ語の研究者にとっては忘れられない聖地？の一つである。ちなみに、ライチシカに限らず、現在、サハリンにはアイヌは一人もいないことになっている。最近のソ連の人口統計資料（Itogi 1990）にも、アイヌという民族名は見あたらない。もっとも、ユジノサハリンスク郷土博物館の研究員の努力によって、「最後のアイヌの女性」と言われている人が、これまでに少なくとも一人発見されている。しかし、この女性は、父がアイヌ人、母が日本人で、アイヌ語はほとんど知らないという（Vysokov i Shubina 1988 : 84）。したがって、アイヌ語サハリン方言の話し手は、現在、サハリンでは一人も知られていない<sup>8)</sup>。だから、折角ライチシカへ行っても、アイヌ語の話し手がいるわけではないのだから、無意味と言えれば無意味なのだが、アイヌ語の研究者としてサハリンまで来て、ライチシカを見ずに帰れるか、というわけで、あえて行くことになったのである。

ライチシカに着いた時は、さすがに「ついに来た」という感慨があった。早速モーターボートでライチシカ湖へ出て、ライチシカ川を数キロ程遡ってみた。岸辺の緑と空の青さが水面に写って、

この世のものとも思われぬ、本当に美しい眺めであった。そして、改めて、この美しい故郷を捨てて北海道に引き上げて来ざるを得なかった樺太アイヌの方々の胸中を思った。

## 2. 1991年度の調査から

1991年度の調査では、前年と同じく、池上二良、中川裕の諸先生の他、新たに斉藤君子（北方民族の口承文芸研究）、井上紘一（民族学）の両先生が加わった。池上先生と井上先生はヴァールにウイлтаの調査に向かわれ、我々はニブフの調査を行うことになった。

1990年度の調査は、初めてということもあって、予備調査的な性格が強かったといえる。1991年度の調査では、前年の経験を踏まえて、目的をしぼるという意味から、ニブフ語の基礎語彙調査を実施した（中川、佐藤、斉藤、近刊）。ここでは前年訪れた地域は省略し、主として初めて訪れた地域について現状を述べることにする。

トランバウスにて：

かつて北樺太の州都であったアレクサンドロフスクからヘリコプターをチャーターして、ニブフが多く住む北部のトランバウス村へと向かった。トランバウスは漁業を主体とした寒村であり、他のあまり豊かとは言えないサハリンの村々に比べても、決して生活条件が良いようには思われなかった。飲料水は井戸水を使っていたが、白濁して、とてもそのままでは飲めそうもないものであったし、村の会館に泊まったのだが、夏だというのに寒くて湿気が多く、体の節々が痛んだ。しかし、村の人達は本当に親切に対応して下さって、感謝にたえなかった。ここで知り合ったニブフの女性、通称ナージャさんは、1956年の生まれだが、ニブフ語を流暢に話す。彼女にニブフ語の発音を特訓してもらったのだが、何度真似ても合格せず弱り果てたが、ニブフ語の発音を詳しく観察する上では有益な経験だった。トランバウスでは、50代の男性と女性一人ずつについて基礎語彙調査を行ったが、かなり忘れていた項目も多く、流暢には話せなかった。村長の話では、この村では普通50代以上でないとニブフ語は話せず、40代以上でないと聞いてもわからないということであったから、ここでも固有の言語の未来は決して明るいものではない。なお、学校でのニブフ語教育も行われていないということであった。トランバウス滞在中、トラックに乗って、さらに北のピアフトゥにも足をのぼし、そこで、そこからさらに北のトゥックという所の出身である、ポグンさんという1919年生まれ的女性からも基礎語彙を調査した。このときは屋外で調査したため、蚊の大群に攻められ、半分程で調査を中止せざるを得なかったのは残念であった。ところで、後で知ったのだが、このころ、モスクワでは例のクーデター騒ぎでゴルバチョフは失脚寸前に追い込まれ、軍とデモ隊が衝突したりして、日本でも邦人帰還命令が出されるなど、結構な騒ぎになっていたようである。もっとも、帰還しろ、と言われても、サハリンの寒村にいたのでは、はい、そうしましょう、というわけには行かない。帰還したくても帰還のしようもなかったらと思うと、おかしいような、恐いような気持ちになった。

ノーグリキにて：

ノーグリキは前年も訪れたが、ここでは60代、70代の二人の女性、及び50代の男性一人から、語彙や昔話を録音した。また、車で北のヴェンスコエという集落へ行き、40代の女性から基礎語彙調査。この人は踊りも踊って見せてくれた。南のカタングリという集落にも行き、50代の男性から基礎語彙調査。この人から英雄叙事詩を語れるという男性がまだいるという話を聞いた。ノーグリキの街に戻って、学校でニブフ語を教えている先生のナターリヤさん（1959年チャイボ生）にサハリン方言の教科書を解説してもらった。ところが、その日の午後に急に我々がヴァールへ出発することになり、時間がなく、全部を解説してもらおうことができなかったのは非常に残念であった。しか

し、この教科書が各地のサハリン方言を必ずしも反映しておらず、彼女の方言とも全く同じというわけではないため、使用に不便があることがわかったのは有益であった。

オハにて：

オハについてみると、前年より食料その他の事情は良くなっているようだった。オハからニェクラソフカ村へ行き、海岸で魚をとっているニブフのキャンプに行き、基礎語彙調査。また、同行したニブフ図書館長の女性にアムール方言の教科書の解説をしていただく。時期が悪く、村の主な人々は海岸のケミという所で魚を取っているということだったので、そこへ行くことになった。車をチャーターしてケミへ向かったが、物凄い悪路で、何度も車がひっくり返りそうになる。なにしろ、深さ2メートル程の穴が、至るところ道路のまん中に数十メートルにわたり開いており、車は路肩のわずかな隙間を傾きながらゆっくり進むので、生きた心地がしない。悪路には慣れているはずの同行のニブフのおばあさん達も、降りて煙草を大地の神に捧げてお祈りを始めた位だから、その道の悪さが想像できると思う。とうとう、一同、車を軽くするため、降りて歩き出したところへ、運良く背丈ほどもあるタイヤを付けた木材運搬用トラックが通りかかり、その荷台に乗せてもらって、やっとケミへ向かった。砂浜を突っ走り、バラックの人影に近付くと、そこがめざすケミであった。そこでシュミット方言（ニブフ語の最も北の方言で、非常に特異な方言であるとされる）の話し手から基礎語彙調査。また、アムール方言の話し手から昔話を録音する。昼食にチョウザメ料理（刺身、串焼き、スープ、キャビア）をごちそうになる。はじめてチョウザメというものを見たが、脂が乗っておいしいけれど、異常に大きくて角まで生えており、なんともグロテスクな魚であった。空模様が怪しくなり、雨が降ったのでは帰れなくなる恐れがあったので、早々にオハへ戻った。

その後、ユジノサハリンスクに戻り、コルサコフ港（大泊）から稚内へ帰る日本のフェリーに乗ることができた時には、体調が悪かったせいもあり、本当にほっとした。なお、私事にわたるが、その年の10月から、勤め先を京都から北海道に変えることが既に決定していたのだが、実際どうなるのか先行きが心配で、サハリンにいても、まったく落ち着かない気持ちであった。前年は前年で、サハリン調査から帰ると、京都に勤めることになり、偶然ながらサハリン調査は私の身の周りの大きな変化と二度までも重なったことになる。その点でも、これらの調査は、私にとって、それだけ印象の深いものとなっている。

### 3. 北方少数民族の言語について

ツングース・満州語に所属するウイльта語は別として、ニブフ語、アイヌ語はともに系統関係が不明な孤立言語である。もっとも、かつて、シュチェルンベルク (Sternberg 1904 : 138) がニブフ語とアメリカインディアン諸語との類似を指摘したが、それ以後の学者の努力にもかかわらず、現在に至るまで、ニブフ語を含めたアジア側の諸言語とアメリカインディアン諸語との系統関係の証明は成功していない (Krauss 1988 : 145)。以下では、互いに系統を異にするこれらの言語の基本構造を対照し、それぞれの言語の構造的な特色を述べることにする。

ウイльта語：

ウイльта語（オロッコ語ともいう）は、ツングース・満州語の方言の一つであり、近い関係にある方言としては、ゴルジ方言、オルチャ方言がある（池上 1978 : 47）。さらに、系統関係はいまだに証明されていないが、ツングース・満州語は、チュルク語、蒙古語と併せてアルタイ語と呼ばれ、基本的な構造において一致を示す（池上 1978 : 37, 47）。まず、この言語のテキストのサンプルを示す（池上 1984 : 1）。

- (1) asi-muna nari pure-ttəi bæiŋdə-xə-ni-ndəə. 「妻を連れて人が山へ猟に行ったんだと。」 : asi「妻」, -muna「連れて」, nari「人」主格, pure「山」, -ttəi向格語尾, bæiŋdə-「猟に行く」, -xə完了動詞語尾, -ni3人称語尾, -ndəə伝聞
- (2) bæiŋdə-gəčči čii bičči-ni-ndəə. 「猟に行かずうっといと。」 : -gəčči「～した後で」連用形語尾, čii「ずうっと」, bičči-「いた」動詞完了語幹(不規則)
- (3) xai-ddəə bejə-mbə-ni mastaa baramba waa-ga-ninda. 「どんなけだものをも大変たくさんとったと。」 : xai-「何」, -ddəə「も」, bejə-「けだもの」, -mbə対格語尾, mastaa「大変」, baramba「たくさん」, waa-「とる」, -ga完了動詞語尾
- (4) andail-li nari niməri-xə-ni-ndəə. 「そのともだちであるひとがあそびにきたと。」 : andail「ともだち」, -li3人称語尾, niməri-「あそびに来る」
- (5) tojə-buŋji geeda wangai-wa waa-xa-ni-ndaa. 「御馳走するために一匹の子をうまないめすとなかいをころしたと。」 : tojə-「ご馳走する」, -buŋji「ために」連用形語尾, geeda「一匹の」, wangai-「子をうまないめすとなかい」, -wa対格語尾
- (6) bargi-gəčči tojə-xə-ni-ndəə. 「食事の支度をして御馳走したと。」 : bargi-「食事の支度をする」
- (7) mittəi dulləə əjʃee beərə učči-ni-ndəə. 「おれにさきにくれるなど言ったと。」 : mittəi「おれに」, dulləə「さきに」, əjʃee「するな」否定動詞命令形(不規則), beərə-「くれる」動詞語幹, -rə現在分詞語尾, učči-「言った」動詞完了語幹
- (8) tawa-takki dulləə beə-ru. 「自分の火へさきやれ。」 : tawa-「火」, -takki再帰的向格語尾, -ru命令語尾
- (9) ə-si-wi beərə učči-ni-ndəə. 「おれはやらない、と言ったと。」 : ə-「ない」否定動詞語幹, -si現在分詞語尾, -wi1人称単数語尾
- (10) məənə dəpči-wi, munalisi-wi. 「自分でおれは食う。おれはおいしい。」 : məənə「自分で」, dəpči-「食べる」, munalisi-「おいしい」
- (11) tari nari čaa dolbonne čadu aunda-xa-ni-ndaa. 「そのひとはそのよるそこにとまったと。」 : tari「その」, čaa「その」, dolbonne「よる」, čadu「そこに」, aunda-「とまる」
- (12) geeda mama unji-wə-ni tolčiči-xa-ni-ndaa. 「ひとりの老婆が言うのをゆめにみたと。」 : mama「老婆」, unji-「言う」, -wə対格語尾, tolčiči-「ゆめにみる」

これらの文からわかるように、語順についてはウイльта語は、基本的には日本語と一致する(動詞が文の末尾に来る)。ただし、否定の表現は例外であって、ウイльта語では、否定表現は否定動詞が動詞連体形(現在分詞形)の前に置かれるという構造をとる((7)、(9)を参照)。また、主語と動詞の間に人称の一致が見られ、動詞に主語の人称が規則的に表示される点も日本語とは異なる(1人称語尾-wi、3人称語尾-niを参照)。形態論的な手法に関して言えば、ウイльта語は専ら接尾辞のみを用いる言語であると言える。形態素の境界は比較的明瞭で、膠着的と言えるが、(2)の bičči-、(7)の əjʃeeのごとく、他の規則的な形と比較して分析不可能な不規則形式があったり、(3)の bejə-mbə-ni「かれのけだものを」の対格語尾-mbəと、(5)の wangai-wa「子をうまないめすとなかいを」の対格語尾-waを比較すれば明らかのように、個々の語幹ごとに語尾の形が決められているという側面もあって、この点ではサピア(Sapir 1921 : 140)が述べるような融合的(fusional)性格をも併せ持つと言える。なお、音韻的な特徴に関して言えば、アルタイ語に広くみられる母音調和の現象(池上 1978 : 51)がウイльта語にも見られる。例えば、完了語尾-xaと-xə、伝聞語尾-ndaaと-ndəəは、それぞれの接合する動詞語幹の母音の広狭に一致して使い分けられている(例えば(4)と(5)を比較)。

ニブフ語（アムール方言）：

以下の例文はニブフ語の教科書（Taksami i dr. 1982 : 75）から取った<sup>9)</sup>。

- (1) Jamin khe nju-d'. 「ヤミンは網を見る。」 : Jamin 「ヤミン」人名, khe 「網」, nju- 「見る」, -d' 終止形語尾
- (2) qan-gir vi-d'. 「犬で行く（犬ぞりで行く）。」 : qan- 「犬」, -gir 道具格語尾, vi- 「行く」
- (3) qan thu vy γ i-d'. 「犬はそりを引く。」 : thu 「そり」, vy γ i- 「引く」
- (4) qan vesqar-d'. 「犬は力が強い。」 : vesqar- 「力が強い」
- (5) qan vike kyr-d'. 「犬は途中で留まった。」 : vike 「途中で」, kyr- 「留まる」
- (6) qan khyr-d'. 「犬は飢えた。」 : khyr- 「飢える」
- (7) Jamin qan ar-d'. 「ヤミンは犬に餌をやる。」 : ar- 「餌をやる」
- (8) Jamin nemla xu-d'. va γ s khu-d'. 「ヤミンはネムラ（魚名）をとる, ワグス（魚名）をとる。」 : nemla 「マスの一種」, va γ s 「マスの一種」, khu- (<xu-) 「とる」

上の例文からわかるように、ニブフ語も概して語順は日本語と同じである（動詞が文の末尾に置かれる）。ただし、目的語の表示法はウイльта語と異なり、特別の目的格語尾を持たない（(1)のkhe「網」を参照）。従って、専ら、動詞の前、という語順によって目的語であることが示されていると言える。もっとも、音韻的な環境によっては、目的語であることが他の特徴からもマークされていることがある。例文(8)を見ると、「とる」という動詞にxu-、khu-の二つの形のあることがわかるが、khu-という形は、直前の目的語の末尾が摩擦音（この場合はs）である場合のxu-の交替形である。従って、この場合には動詞の語頭子音の交替が直前の名詞が目的語であることを（消極的にはあるが）マークしていると言える。また、ニブフ語ではウイльта語のように時制が必ず動詞にマークされるということもない。終止形語尾-d'に終わる形は、文脈によって現在にも過去にも訳され得る（Krejnovich 1979 : 315）。さらにはウイльта語のように主語の人称が動詞にマークされるということもない。なお、否定表現もウイльта語と異なり、一種の否定の補助動詞が動詞の前ではなく、後に置かれる。次の例文（Krejnovich 1979 : 317）を参照。

- (9) Ni ra-do χ qhau-d'. 「私は飲まなかった。」 : Ni 「私」, ra- 「飲む」, -do χ 与格・方向格語尾（不定法語尾）, qhau- 「ない」 否定動詞

形態的な手法に関して言えば、ウイльта語同様、膠着的であり、専ら接尾辞を用いる言語であると言えるが、少数ながら接頭辞的要素も用いられる。次の例の再帰接頭辞ph-を参照（Taksami i dr. 1982 : 78）。

- (10) ymyk ph-ot-t'. ymyk huxt ot-t'. 「母は自分に（着物を）縫う。母は着物をぬう。」 : ymyk 「母」, ph-再帰接頭辞, ot- 「縫う」, -t' 終止形語尾, huxt 「着物」

なお、音韻的な特徴に関して言えば、q、χのような口のかなり奥で発音する子音があること、k、khのような有気、無気の対立のあることが注目される。

ニブフ語 (サハリン方言) :

以下の例文はニブフ語の教科書 (Sangi i dr. 1981 : 69) による。

- (1) aki tol nga  $\chi$  a-d. 「兄さんは海のけだものを撃つ。」 : aki 「兄さん」, tol 「水 (この場合は「海の」)」, nga 「けだもの」,  $\chi$  a- 「撃つ」, -d 終止形語尾
- (2) aki nga xu-d. 「兄さんはけだものをとる。」
- (3) aki al  $\chi$  <sup>10)</sup> khu-d. 「兄さんはアザラシをとる。」 : al  $\chi$  「アザラシ」
- (4) tu al  $\chi$  pila nga. 「このアザラシは大きいけだもの (だ)。」 : tu 「この」, pila 「大きい」
- (5) aki urla nga xu-d. 「兄さんは良いけだものをとる。」 : urla 「良い」

サハリン方言も基本構造はアムール方言と同様である。たとえば、やはり摩擦音で終わる目的語の後に来る動詞の語頭子音の交替が見られる ((2)と(3)を比較)。しかし、基本的な文法形式である動詞の終止形語尾の形が異なる (アムール方言は-d、サハリン方言は-d) など、両者には軽視できない差異が存在する。なお、サハリン方言内部でもかなりの方言差があるようである (Krejnovich 1979)。

アイヌ語 (サハリン方言) :

以下の例文は1985年6月30日に、浅井タケ氏 (1902年サハリン西海岸 'otasuh生) から筆者が採録したtuytah (昔話) の一部である。

- (1) sine kotan 'ohta sine henke, mahpoo-ho tura 'okay-ahci manu. 「ある村に一人のじいさんが娘といたとき。」 : sine 「ある」, kotan 「村」, 'ohta 「に」, henke 「じいさん」, mahpoo 「娘」, -ho 所属形語尾, tura 「共に」, 'okay 「いる」 複数形, -ahci 複数語尾, manu 伝聞
- (2) mahpoo-ho reske reske reske yayne, 'onneru merekopo ne an manu. 「娘を育てて育てて育てているうちに、大人の娘になったとき。」 : reske 「育てる」, yayne 「～しているうちに」, 'onneru 「大人の」, merekopo 「娘」, ne 「～に」, 'an 「ある」 単数形
- (3) konrusuy-ahci kusu, kaana-hci yahka henke ne'anpe mahpoo-ho 'oskoro manu. 「(人々が娘を) もらいたいので、頼んだけど、じいさんは娘を惜しがったとき。」 : konrusuy 「ほしがる」, kusu 「ので」, kaana 「要求する」, yahka 「～しても」, ne'anpe 「は」, 'oskoro 「惜しむ」
- (4) 'episkanuwa pirika 'aynu 'utah pirika nispa 'utah kaana-hci yahka 'anpene 'oskoro yayne 'e-ko-'ocis-ahci kusu ko-caruwen-ahci i nee manu. 「周囲から、立派な男達、立派な旦那達が頼んだけど、(じいさんが娘) をひどく惜んでいるうちに、(彼らはそのことでじいさんに) ひどく腹を立てたので、(じいさん) に悪口を言ったのであったとき。」 episkanuwa 「周囲から」, pirika 「良い」, aynu 「男」, 'utah 「達」, nispa 「旦那」, 'anpene 「ひどく」, 'e- 「～について」 格関係表示, ko- 「～に対して」 格関係表示, 'ocis 「ひどく腹を立てる」, kocaruwen 「悪口を言う」, i 「こと」, nee 「である」

アイヌ語サハリン方言も基本的な語順はウイльта語、ニブフ語と同じく、主語、目的語、動詞の順序である。しかし、文法関係の表示は、ウイльта語のような格語尾を持たないので、名詞そのものには全く表示されないのに加え、ニブフ語のような動詞の語頭子音の交替のような現象もないた

め、もっぱら語順によって示されていると言える。ただし、(4)の'e-「～について」、ko-「～に対して」のような格関係を表示する接頭辞が、名詞にではなく動詞に付加される場合もある。従って、形態論的な手法に関しては、派生、屈折、活用において専ら接尾辞のみを用いるウイльта語や、同じく大部分を接尾辞に頼ると言っても良いニブフ語と異なり、接頭辞の果たす役割が相対的に大きいと言える。形態素の境界は明瞭かつ規則的で、ニブフ語同様膠着的である。また、文法関係は語順によって示される傾向が強く、孤立的 (isolating) な性格が強いと言える (アイヌ語の孤立的性格については佐藤 (1991) を参照)。

アイヌ語 (北海道方言) :

以下はアイヌ語千歳方言に話し手である白沢ナベ氏 (1905年千歳川上流'ewkot生) から、筆者が1992年10月18日に採録した'irupaye (英雄叙事詩yukarを節を入れなくて演ずるもの。千歳では女性は、yukarを通常'irupayeの形式で演じるとのこと) のテキストの一部である。

- (1) neywa ka 'a-'i-tuye noyne humas wa, ramukirakirak-an. 「どこからか切られるような気がして、私は胸騒ぎがした。」 : neywa 「どこから」、ka 「か」、'a- 受身、'i- 「私を」 雅語 1 人称単数目的格、tuye 「切る」、noyne 「ように」、humas 「気がする、そう思う」、wa 「～して」、ramukirakirak 「胸騒ぎがする」、-an 「私は」 雅語 1 人称単数自動詞主格
- (2) ramukirakirak-an 'uturu ta, he'uyrototo-'an kane, 'isitoma-'an ruwe 'ene 'an i ne wa, 「私は胸騒ぎがするうちに、震えながら、恐ろしく思うことはこのようなことであって」 : 'uturu 「その間」、ta 「～に」、he'uyrototo 「震える」、kane 「～しながら」、'isitoma 「恐がる」、ruwe 「こと」、'ene 「こう」
- (3) ne'un ne wa humas ne ya ka 'a-'eramuskari wa kusu, 「どうしてそういう気持ちがあるのか私にはわからなくて、そのために」 : ne'un 「どう」、ya 「か」 疑問、ka 「も」、'a- 「私は」 雅語 1 人称単数他動詞主格、'eramuskari 「知らない」、kusu 「そのために」
- (4) cise 'onnay 'epitta 'a-sik-kus-pa-re, 「家の中を全部私は目を通した。」 : cise 「家」、'onnay 「中」、'epitta 「全部」、sik 「目」、kus 「～を通る」、-pa 多回語尾、-re 使役語尾

アイヌ語北海道方言もサハリン方言と基本構造は同じである。ただし、サハリン方言には北海道方言にはない複数接辞-hciがあったり、音韻構造の点で、サハリン方言は音節末に閉鎖音が立たないこと、北海道方言と異なり母音の長短の対立があることなど、差異も見られる。なお、北海道方言の例(4)のsik-kuspareという動詞は、sik「目」という名詞が動詞kuspare「通らせる」と合成されて一語となった、いわゆる「名詞抱合 noun incorporation」の例である。(アイヌ語の抱合の特色については佐藤 (1992) を参照)。名詞と動詞の結合は、アイヌ語と必ずしも性質が同じではないが、ニブフ語にも見られるという (渡辺 1992 : 187-188)。このように接辞や抱合が使用される結果、アイヌ語では相当長い語を作ることができ、統合度 (一語の中に含まれる形態素の数) はウイльта語やニブフ語に比べれば高いのではないかと思われる。時制については、アイヌ語はニブフ語と同じく、ウイльта語のような動詞に表示されるマーカーを持たない。副詞や助動詞によって過去や未来を明示することは可能であるが、時制は動詞の義務的なカテゴリーではない。人称については、ニブフやウイльта語とも異なり、1、2 人称に関しては主語のみならず目的語の人称も動詞に表示される。これはアイヌ語を周辺の言語と区別する大きな特色と言える。以下の例を参照。

- (5) 'aynu mosir 'epunkine kusu 'an kur 'a-ne 'a korka, 'e-'an kusu 'a-'e-'ekosi wa 'ikesuy pe 'a-ne ruwe ne. 「私は人間の国を見張るためにいる者だったのだが、おまえがいるのでおまえに任せて私は出て行ったのだ。」 : 'aynu 「人間」, mosir 「国」, 'epunkine 「見張る」, kur 「者」, 'a 「た」 過去を表す助動詞, korka 「けれど」, 'e- 2 人称単数主格, 'a-'e- 「私がおまえを、に」 雅語 1 人称単数他動詞主格・2 人称単数目的格, 'ekosi 「任せる」, 'ikesuy 「出て行く」, pe 「者、物」

ちなみに、否定表現もウイльта語やニブフ語と異なり、アイヌ語では否定の副詞が動詞の前に置かれる (somo 否定副詞、ki 「する」)。

- (6) neyta pakno kem rir sake kem rit tonoto, tumunci kamuy 'esocupu ka somo ki-no ku 'easkay pe ne ruwe ne na. 「いつまでも血しぶきの酒、血しぶきの濁酒を、戦争の神は片付けもしないで飲むことができるのだぞ。」 : neyta 「どこ」, pakno 「まで」, kem 「血」, rir 「波」, sake 「酒」, tonoto 「濁酒」, tumunci kamuy 「戦争の神」, 'esocupu 「宴会を切り上げる」, ka 「も」, somo 「ない」 否定副詞, ki 「する」, -no 「～して」, ku 「飲む」, 'easkay 「できる」, pe 「もの」, ne 「である」, ruwe 「こと」, na 「ぞ」

#### 4. おわりに

以上、サハリンにおける北方少数民族調査の概略、及びこれら諸民族の現状について触れ、言語的な特色についても簡単に論じた。このような概観によるだけでも、これら三つの民族が互いに生業を異にし（ウイльтаはトナカイ飼養、ニブフ、アイヌは漁労、狩猟）、構造的に容易に類似点を見だし難い程異質な言語を話す、全く異なる民族であるということを具体的に示し得たものと思う。狭い島々に、長期間、これだけ近接して居住していながら、相互に影響は与えつつも、それぞれが独自の言語、文化を現在まで保持し続けて来たことは、考えてみると驚くべきことである。これらの北方民族の事例は、異質の言語、文化の共存という難問題の、一つの貴重な実例を示すものと考えられるのではないだろうか。

#### 註

- 1) 池上二良先生が1979年にサハリンに行かれた時には、嚴重な監視がなされ、調査などは全く不可能であった由。
- 2) 例えば、北海道新聞は1990年に「蝦夷錦の来た道」と題して、サハリンを含む極東地方の少数民族の現状に触れる報告を行っている。
- 3) 言うまでもなく、文化の理解において言語は重要である。このことは例えば日本語を知らずに日本文化、日本文学の研究をすることが可能かどうか、考えてみればよく理解されるであろう。
- 4) 国際学術研究「サハリンにおける少数民族の言語に関する調査研究 —— サハリンアイヌ語、ウイльта語、ニブフ語」(研究代表者：北海道大学言語文化学部教授(当時)村崎恭子)。
- 5) ウイльтаは自称で、以前はオロッコという名称で知られていた(池上1980: i)。
- 6) ニブフは別名ギリヤークとも呼ばれる。旧ソ連の公称は「ニブフ」(意味は「人間」)であるが、この呼称はアムール川流域とサハリン北西部で用いられる語形に基づいている。これに対しサハリン東南部では(カナ表記するとすれば)「ニグブン」という形が用いられる(以上服部健(服部 1988: 1408)の記述による)。
- 7) オタスの杜の歴史と現状については国立民族学博物館の大塚和義先生が述べておられる(朝日

- 新聞「サハリン民族学点描」第5回、1991年5月14日）。
- 8) もっとも、1990年度の調査で、ポロナイスクのある朝鮮人の青年から、アイヌの老婦人が一人いる、という情報をもたらされたが、老婦人本人に会ってこの情報の真偽を確認するまでには至らなかった。また、大塚和義先生もこの種の情報について触れておられる（朝日新聞「サハリン民族学点描」第3回、1991年4月23日）。
- 9) 教科書のキリル文字は便宜的に概略以下のように翻字した。a=a、б=b、в=v、г=g、F=γ、д=d、e=e、ё=jo、ж=zh、з=z、и=i、й=j、к=k、к'=kh、қ=q、қ'=qh、л=l、м=m、н=n、ң=ng、Нб=N、o=o、п=p、п'=ph、р=r、р̄=ř、с=s、т=t、т'=th、у=u、ф=f、х=x、х̄=χ、х̅=h、ч=ch、ш=shsh、ы=y（実際に耳で聞いた感じでは、日本語の「う」と非常に近い）、ь='、э=e、ю=ju、я=ja
- 10) 原文では alq となっているが、alχ の誤植と思われるので改めた。なお、オタイナ博士による朗読（1990年7月20日）でも、この箇所は alχ と発音されている。

### 参 考 文 献

- アウステルリッツ、R. P. 1990. 「類型から見たギリヤーク語—日本語との関係において」、崎山理編『日本語の形成』、東京：三省堂、169-184.
- 服部健. 1988. 「ギリヤーク語」、千野栄一他編『言語学大辞典』第1巻、東京：三省堂、1408-1414.
- 服部四郎（編）. 1964. 『アイヌ語方言辞典』、東京：岩波書店.
- Ikegami, J. 1956. The Substantive Inflection of Orok. *Gengo Kenkyu* 30. Tokyo, 77-96.
- \_\_\_\_\_. 1959. The Verb Inflection of Orok, *Kokugo Kenkyu* 9. Tokyo, 34-79.
- 池上二良. 1978. 「アルタイ語系統論」、『岩波講座日本語12—日本語の系統と歴史』、東京：岩波書店、35-98.
- \_\_\_\_\_. 1980. 『ウイльта語基礎語彙』、札幌：北海道大学文学部言語学研究室.
- \_\_\_\_\_. 1984. 『ウイльта口頭文芸原文集』、札幌：北海道教育委員会.
- \_\_\_\_\_. 1985. 『ウイльта民族語彙』、札幌：北海道教育委員会.
- Itoji, 1990. *Itoji usesojuznoj perepisi naselenija 1989 goda, vol I; Raspredelenie naselenija po natsional'nosti, rodnomu jazyku i vtoromu jazyku narodov SSSR*, Juzhno-Sakhalinsk : Gosudarstvennyj komitet SSSR po statistike, Juzhno-Sakhalinsk.
- Krauss, M. E. 1988. Many Tongues — Ancient Tales. *Crossroads of Continents*. Washington, D.C. : Smithsonian Institution, 144-150.
- Krejnovich, E. A. 1979. Nivskij jazyk. *Jazyki Azii i Afriki* 3. Moskva, 295-329.
- 澗瀧久治. 1981. 『ウイльта語辞典』、札幌：北海道教育委員会.
- 宮岡伯人（編）. 1992. 『北の言語』、東京：三省堂.
- 村崎恭子. 1976. 『カラフトアイヌ語』、東京：国書刊行会.
- \_\_\_\_\_. 1979. 『カラフトアイヌ語 — 文法篇』、東京：国書刊行会.
- 中川裕、佐藤知己、齊藤君子、近刊. 「サハリンにおけるニブフ語基礎語彙の地方差」.
- 西鶴定嘉. 1942. 『樺太アイヌ』、豊原：樺太文化振興会.
- Panfilov, V. Z. 1968. Nivxskij jazyk. *Jazyki narobov SSSR*, tom 3. Leningrad : Izdatel'stvo Nauka, 408-434.
- Sangi, V. M. i Otaina, G. A. 1981. *Bukvar' dlja podgotoviel'nogo klassa nivxskix shkol*. Leningrad : Izdatel'stvo Prosveshshenie.
- Sapir, E. 1921. *Language*. New York : Harcourt, Brace and Company.

- 佐藤知己. 1991. 「日本語とアイヌ語、ニヴフ語」. 『国文学解釈と鑑賞』第56巻1号.  
東京：至文堂. 17-26.
- \_\_\_\_\_. 1992. 「「抱合」からみた北方の諸言語」. 宮岡伯人編『北の言語』. 東京：三省堂. 191-201.
- \_\_\_\_\_. 近刊. 「サハリンで用いられているニヴフ（ギリヤーク）語教科書について」.
- Savel'eva, V. H. i Taksami, Ch. M. 1970. *Nivxsko-russkij slovar'*.  
Moskva : Izdatel'stvo Sovetskaja Entsiklopedija.
- Sternberg, L. 1904. Bemerkungen über Beziehungen zwischen der  
Morphologie der giljakischen und amerikanischen Sprachen.  
*Internationaler Amerikanisten-Kongress*. Stuttgart. 137-140.
- Taksami, Ch. M., Puxta, A. i Vingun, A. M. 1982. *Bukvar' dlja podgotovitel'nogo klassa nivxskix shkol (amurskij dialekt)*. Leningrad : Izdatel'stvo Prosveshshenie.
- 鳥居龍蔵. 1924. 『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』. 東京：岡書院. (『鳥居龍蔵全集』第8巻所収. 東京：朝日新聞社. 1-258. )
- Tsumagari, T. 1985. Grammatical Outline of Uilta. *Ajia Afurika Bunpo Kenkyu* 14.  
Tokyo. 1-15.
- Vysokov, M. S. 1985. Sovremennaja jazykovaja situatsija v raj'onax prozhivanija saxalinskix nivxov. *Etnograficheskie issledovanija sakhaliskogo oblastnogo krajevedcheskogo muzeja*. Juzhno-Sakhakinsk : kraevedceskij muzej. 71-76.
- Vysokov, M. S. i Shubina, O. A. 1988. Poslednjaja ajnka juzhnogo sakhalina. M. S. Vysokov. *Ajny*. Juzhno-Sakhalinsk : Sahalinskij oblastnoj kraevedcheskij muzej. 82-88.
- 渡辺みち子. 1893. 「ギリヤーク語」. 『言語』第12巻11号. 東京：大修館書店. 62-69.
- \_\_\_\_\_. 1992. 「ギリヤーク語他動詞文の特徴」. 宮岡伯人編『北の言語』. 東京：三省堂. 179-190.

(本分校 文化人類学研究室)